# 西洋に対するスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの影響

# ―個人的並びに集団的生活に関する未来予測―

### 2013年6月9日

### スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕150周年記念祝賀会開会式

### スワーミー・アートマージュニャーナーナンダ師による講話

### 於・インド大使館

初めに、スワーミー・メーダサーナンダ師に対し、私の心からなる敬愛の念を捧げ、このたびの祝賀行事に参加するようお招きくださったことに対し、篤く御礼申し上げたいと思います。また本日ここでお話しなさる方々を初め、ここにお集まりの皆々様に対しても、心からなる御挨拶を申し上げます。私は、このようなお目出度い機会を皆様とともに過ごすことを、本当に嬉しく思っております。

## 序論

スワーミー・メーダサーナンダ師が私に話すようにと示唆された「西洋に対するスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの影響」という話題を、私はいささか奇妙な感じで受け取りましたが、それは私たちがふつう日本をアジアや東洋と密接に結びつけて考えているせいなのかもしれません。今や西洋と東洋という区別は次第に無くなりつつありますが、日本はその両者間の間隔を埋め始めたアジアにおける最初の国でありました。過去50年間にわたり日本で起こった産業・技術・近代化のすさまじい進歩は、良きにつけ悪しきにつけ、所謂西洋文化をこの国の人々に大量にもたらしました。したがって私たちは、仏教、禅、神道などと共に、近代西洋社会の特徴を日本社会の中に数多く見ることができますが、残念ながらこのことは唯物主義や世俗主義へと向かう傾向を産み、こうした傾向はアジア全般に、特に今日のインドにすら現れ始めております。

この話題に関するもう一つの興味深い側面は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが、1890年代に二度にわたって西洋を訪問し、東西間の溝を埋めるために大いなる役割を果たしたことであります。米国に滞在中、スワーミージは「仏陀が東洋の人々に伝えるべきメッセージをもっていたように、私は西洋の人々に伝えるべきメッセージをもっている」という有名な声明を発表されました。ところが、数多くの講演や書簡や図書を通して彼が西洋の人々に向けて発したメッセージは、今や西洋のみならず世界中の人々に対するメッセージとなってしまっております。バクテイ、カルマ、ジュニャーナ、ラージャの四つのヨーガは、すべて米国と英国で書かれ発表されたものではありますが、今やそれらはインドを初めその他の国々に対する重要なメッセージとなっております。スワーミージは、西洋から帰る途中、スリーランカ国のコロンボ市を初めとし北インドのアルモーラに至るまでのインド各地で、実にたくさんの講演をしておられますが、それらの講演は、力点の違いこそあれ、ヴェーダーンタ哲学の原理を説いたもので、彼が生涯を通じて一貫して説いた教えの真髄をなすものでありました。

## 西洋と東洋に対する態度

西洋人の心情や社会を知るにつれ、スワーミー・ヴィヴィエーカーナンダは、西洋に関するある種の見解を抱くようになりましたが、そうした見解の多くは、彼自身が米国や英国や欧州諸国を訪れたことによって、正しいものであることを確認いたしました。しかし、彼自身直接観察して得た見解の中で、のちに訂正したものもいくつかあります。こうして得られた西洋に関する彼の理解は、それまで彼が祖国インドにとって必要でありかつ最大の長所と考えていたものと、全く異なるものでありました。簡単に言うならば、西洋は、富や唯物主義や工業技術や組織力の国であったのです。宗教は、どこにでも見られましたが、スワーミージの目には、狭量でしばしば皮相的にしか見えませんでした。ところが、インドはこれとまったく逆の状況で、霊性は、国民の精神的中核をなしていたものの、ヴェーダーンタの主要な教えを実行できないままでいました。そのうえ、長年にわたる外国人による搾取や社会的・経済的・政治的自由の欠如が、インドの人々を貧困と無秩序と無気力の状態におき、これをスワーミージは、タマスと死の徴候ととらえていました。したがって、インドにとって最も必要なものは宗教ではなく、社会的・国民的な意識の覚醒であると説いたのです。他方、西洋にとって最も必要なものは、他の宗教との調和を図り、自己の内面生活を深化させる新しい宗教観念であり、より一層内観的な、そして黙想的な宗教観念であると、説いています。簡潔に言うならば、インドにおける彼の使命は、人々を目覚めさせることであり、西洋における彼の使命は、人々の進歩の速度を遅らせることだったのです。

スワーミージが初めて米国にやってきた時、インドと西洋との間の一種の相互扶助を心の中に描いていました。つまり、インドは、より成熟した精神的な見方を西洋に提供し、西洋はお金や技術や組織方法によってインドを助ける、といったイメージです。スワーミージが米国からインドに帰国する途中、特にアラシンガ・ペルマルのようなマドラス在住の信者たちや自身の兄弟弟子に宛てて書いた手紙を読みますと、西洋からの援助に期待する彼の期待がいろいろと揺れ動いていたことがわかります。時々アメリカ人の気前の良さについて書いているかと思えば、インドの人々を助けるのに彼らは何もしてくれない、とも書いています。尤も、こうした問題の大部分は、伝統的なキリスト教徒や聖職者たちによって歪められたインド観から派生してきていたのですが、スワーミージは、西洋がインドにとっての大いなる収入源になるだろうという幻想を早々と捨てたように思われます。

スワーミージはまた、経験を積んでいくにしたがって、彼のメッセージが西洋に受け入れられるだろうという考えをも変えていきました。彼の演説に対する聴衆の最初の反応やマスコミの追従は、彼のヴェーダーンタに関するメッセージが、西洋の大衆に受け入れられるだろうという希望を一時大きく膨らませたのですが、次第に彼は自分の楽観論を取消し、ひとたび彼が西洋を去ると同時に、大衆の熱狂は冷めてしまうであろうと考えたのです。しかしそれにもかかわらず、彼はインドの真価を、単に西洋のマスコミだけでなく、西洋の偉大なる思想家たち、特に彼の才能や心の偉大さがわかるハーバード大学の教授たちに理解してもらうことが大切だと、考えるようになりました。そこで彼は、弟子のアラシンガに手紙を書き、「外国の人々によって認められることは、インドを目覚めさせることに繋がるし」また「ここ米国における私の働きが、インドに大きな反響をもたらすということを、君は知っているかい？」とも言っています。それと同時にスワーミージはまた、米国人や英国人の中に、特に彼が滞在した町々に、彼の教えにどこまでも従っていこうとする数は少ないが真面目な人々もいる、ということを発見いたしましたので、同じ手紙の中で、「日々ここの人々は、私のことを理解してくれるようになってきており、内緒の話だが、君が考える以上に私はこちらで人々に影響を与える存在になりつつあるんだよ。」とも書いています。

## 西洋へのメッセージ

では西洋に対してスワーミージが伝えようとしたメッセージとは、いったい何でありましょう？　驚くべきことに、それはヴェーダーンタの「不二一元論」であり、彼の師のラーマクリシュナに関しては、その名前すらほとんど口にしませんでした。このことは私たちにも奇妙な感じを与えますが、ましてや彼の兄弟弟子たちにとっては、なおさらのことだったに違いありません。しかし、彼にはそうするだけの十分な理由があったのです。一つの理由は、東洋と西洋における様々な発達段階に関する一つの理論を持っていたからなのです。スワーミージは、インドはほとんど死んだように眠っている昏睡状態「タマス」に陥っているので、この眠りから目覚め、すこし活発な「ラジャス」の状態を楽しませる必要がある、と感じていました。つまり、貧しい人々に対してパンを与えるだけでなく、少しの贅沢を味あわせることが、インドの人々を眠りから目覚めさせるのに役立つのではないか、と考えたのです。「今は、人々に放棄を説くべきではない。彼らは十分過ぎるほど既に放棄している。だから、今や活発な活動をすべき時なのだ。」と。だからこそ、スワーミージが最ももっともよく口にした「目覚めよ！立ち上がれ！ゴールにたどり着くまで休むな！」という言葉は、インド国内だけで発せられましたし、神殿に鎮座する神々でも、自分の胸の奥にいる神々でもなく、貧しく虐げられている人々の中にいる神、つまりダリッドラ・ナラーヤナへの礼拝を、強く勧めていたのです。

さて、インドの人々が「タマス」の状態に陥っていたのに対し、西洋の人々は、異常過ぎるほどの「ラジャス」の状態にどっぷりと浸かっていました。スワーミージは、西洋人の心は外向的であり、快楽や物質的向上や富や贅沢に向けられていることを知りましたが、世俗の生活や財産を楽しんでいた彼らが、そうした外的な物から得られる幸福に限界を感じてきている事実にも、気づきました。それでスワーミージは、西洋においても多くの人々が、ヴェーダーンタの不二一元論を理解するのに必要な「放棄」という概念を理解し得る機会が訪れた、と感じたのです。彼はまた、西洋の人々が、単に教会に通う宗教よりも精神的にさらに深いものを求めていることを感じ、内なる自我の栄光を彼らと共に分かち合いたいと強く願い、さらに天国から自身に内在する神へと彼らの視点を移そうと、努力しました。このことは、イエス・キリストが人々に伝えたかったメッセージ、つまり「神の国は自身の心の中にある」や「私と父は一つである」と、同じ内容なのです。しかしながら、この二つのメッセージは人々に伝わらなかったし、十分には理解されなかったので、スワーミージは、この教えの真意をアメリカの人々に理解してもらおうと強く望んだのです。さらに彼は、宗教の普遍的な性質、真理の同一性、科学と宗教の調和、その他数々のインド知恵を強調しようとしました。そしてひとたび西洋の人々に伝えるべきメッセージを定めるや、数は少ないもののこの教えを実行に移す真摯な人々がいることもわかり、彼は西洋における己の使命の本当の意義を理解したのです。それは、ただ単にインドを助けるために必要な資金を集めることではなく―それもある程度は考えられたことですがー、自国にセンセーションを起こすことでもなくーそれも実際に起こったことですがー、米国や英国や究極的には全西洋社会の人々が、素直な心をもち、真偽をはっきり識別し、ヴェーダーンタというインドの古代の知恵を身に付けてほしい、という彼の願いから出たものなのです。

## 未来は我々個々人に何をもたらすか？

西洋においてスワーミージが特に強調した教えは、個々人の在り方についてでした。社会や政治に関しては、米国はインドよりはるかに進歩しており、インドは米国から大いに学ぶべきものがある、とスワーミージは感じていました。また彼は、特に、女性の自由さ、貧者の上昇志向性、弱者に対する民衆の関心、囚人達が社会復帰するための援助などに、感嘆もしていました。もちろん、彼はそれだけでなく、西洋社会における富裕階級の特権を見て、それは形を変えたカースト以外の何物でもないことを感じてもいました。しかしながら、一般的に言って、集団生活が個々人の犠牲の上に成り立っており、それはまさしくインドにおける状況と正反対である、と観察したのです。そこで彼は、インドの弟子たちに宛てた手紙の中で、次のように書いています。「自由は成長のための第一条件であるが、君たちの先祖は、あらゆる自由を人間の霊魂に与えたので、その結果として宗教が発達した。しかし、彼らは身体を束縛の下に置いたため、社会は発展しなかった。それとちょうど逆のケースが西洋で、社会にあらゆる自由を与え、宗教にはそれを与えなかった。だが今や、東洋では社会の足枷が外され、西洋では宗教の足枷が外されつつ。」と。

個人的な見解からすれば、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの貢献は、前代未聞の比類なきものであったと思います。おそらく、西洋社会において、これほど多くの人々が、彼のような非キリスト教国の精神指導者から深い影響を受けたことは、なかったのではないでしょうか。尤も、一世代前には、エマーソンやソローが、彼らの説く超越主義の哲学を通して、典型的なヴェーダーンタの概念を世の人々に伝えていましたし、クリスチャン・サイエンス（＝キリスト教科学）も、様々な東洋思想を独自のやり方で借用し、さらには神智学者達までが、より積極的にそれを摂取していました。そして、これらの運動はいずれも、東洋思想に脚色を施し、西洋の聴衆に受け入れられやすいような形で提示されていたのです。ところで、スワーミー・ヴィヴィエーカーナンダは、西洋の大衆に、脚色の施されていない生のままの形で提示した、インド人で最初の権威ある精神指導者でした。事実、彼は、西洋の人々の心情に合うように、秘教的な教理や、サンスクリット語の古典からの長い引用や、過度の個人崇拝などを全て避けていましたが、人々に伝えようとする彼のメッセージに関しては、一切の妥協を許しませんでした。多分そのことが、彼のメッセージに多くの人々が心を動かした原因となっているのではないでしょうか。疑いもなく、ごく普通の人でも、スワーミージの中にある威厳、精神性、清浄さ、無欲さが、彼の発する言葉に説得力を与えていることを、感じ取ることができていたはずです。たとえどんな理由があるにせよ、スワーミージがシカゴにおける宗教国際会議で演説したその日から、西洋の人々の間には、東洋の知恵に対する正しい認識が生まれ始めました。ある意味で、彼がまず水門の扉を開け、ごく短期間のうちにインドから他の霊的指導者が多数訪れるようになり、その結果として今日、ヴェーダーンタの基本的教義の多くが、大衆にごく普通に受け入れられるようになっています。したがって、人々が彼らの教会の保守的で独断的な信仰を斥け、精神的な大道をしっかりと踏まえ、内面的発達や変容や心の平安を熱心に求めていくと、彼らの精神的旅の果てには究極の悟りが得られるという、確信が人々の心の中に出来上がりつつあります。こうした傾向は、年ごとに強くなってきており、信仰生活をこのような気持ちで受け止めていく真摯な人々にとっては、まことに喜ぶべき現象と言っていいでしょう。

## 西洋社会における集団的生活の未来

スワーミージの言葉を借りて言えば、宗教を人間が己れ自身の神性を悟る手段として考える、自由で成熟した心の持ち主が増えてきているのは、確かに事実ですが、しかしだからと言って、宗教が今まで持っていた狭量さや頑迷さや排他性などが全く消え去ったわけではありません。不幸なことに、ある作用に対しては必ずその反作用があるという、科学にも宗教にも通用する真理があります。したがって私たちは、ほとんどすべての宗教に、原理主義や正統主義に基づく激しい反撃が起こる、という事実を見てまいりました。それが最も明白なのはイスラム教でありますが、キリスト教にも、ヒンドウ教にも、ユダヤ教にも、その他の宗教にも、見られます。さらに、西洋の人々の集団生活に関して言えば、一方では友愛精神や普遍性や一体性や愛があり、他方では頑迷さや悲痛さや憎悪や離反があって、これら二つの互いに相容れない力の緊張が存在しています。しかしそれにもかかわらず、善や正直や愛の力が最終的には勝つということを、信じ難いことかもしれませんが、少なくともそうなることを望んでやみません。このことは、今から120年前に、スワーミージが世界宗教会議において予言しています。彼こそが、愛の勢力の種を蒔き、不寛容や憎悪に対し、死別の弔いの鐘を鳴らした最初の人だったのです。彼の予見した普遍的な平和と調和に満ちた光景がますますはっきりと現れ、憎悪や暴力へと向かう傾向が消え去っていくことを、ともに祈ろうではありませんか。そしてまた、ヴェーダーンタ哲学の理想とする、神と自己との一体感が、すべての人類を一つの家族にし、西洋のみならず世界中のすべての国民の心の中に、相互愛と敬意が育ちますようにと、祈ってやみません。